

フランスのまちとその水辺

(株)建設技術研究所河川計画本部
技術第三部次長 阿部令一
(前(財)リバーフロント整備センター主任研究員)

昨年(2019年)の6月、2週間にわたり、(財)リバーフロント整備センターからの派遣により、フランス西部および北部のまちと川にふれる機会を得、本年(2020年)5月の数日間再度パリに滞在する機会を得ましたので、その見聞の範囲内でフランスのまちとその水辺について御紹介します。

1. 舟運に依存してきたまち

パリが遠く遡ることローマ時代に、シテ島を中心とした舟運によって発達し、政治・経済・文化の中心となったことはよく知られています。わが国の主要都市の大半が臨海部に位置しているのに対して、フランスでは運河が四通八達し、同国の4大河川(セヌ川、ロアール川、ガロンヌ川、ローヌ川)を互いに結んでおり、パリ、リヨン、ナント、ボルドー、ツールーズ等の著名都市の殆んどが内陸にあって、地の利を生かした舟運で栄えてきました。パリが今なお国内有数の内陸港を擁しているように、自動車交通が発達した現在でもこれら都市のいくつかにおいては舟運が盛んですが、パリのように港としての機能が市の中心部から近郊に移され、市内の運河もその機能を著しく低下している都市や、運輸機能が道路に移り舟運が全く衰えてしまった都市も少なくないようです。

このような都市では、パリをはじめとして河岸に自動車交通が卓越し、波止場が駐車場として積極的に活用された時代がかつてあったといえます。

2. 水辺の復権

パリでは現在、昨年(2019年)のサミットの会場となったラ＝デファンス地区をはじめ、いくつもの大規模市街地再開発事業が実施されています。これら事業は市の西側に比し停滞気味な東側に偏していますが、東側と西側とを問わず、殆んどがセヌ川と運河に面しています。また、首都パリの「グラン＝プロジェクト」として大統領自らの指導の下に、国家事業として推進されてきたビレット地区の事業をはじめとする9大プロジェクトの8つまでが、同様にセヌ川と運河に面しています。

都市機能の更新を図るべく再開発事業を興こすとするれば、そこはまさに一時代前に運輸流通機能の中心的役割を果たしていた河港とその隣接地に他ならなかったのだと考えられます。

しかしながら、オープンスペースとしての水辺の価値が認識されたのはそう古いことではないようです。



セヌ川、サン＝ベルナル港の整備(抽象彫刻を中心とした野外彫刻展示場としての整備)



セヌ川沿川、シトロエン地区再開発事業完成予想パース



ルルク運河とサンマルタン運河の間にあるビレット船渠の岸辺。沿川は住居地区に生まれかわった。

パリ市議会は1978年にセヌ河岸および運河の整備方針を承認しました。これは港湾機能の整理統合ならびに遊歩道と親水施設の整備により、区域毎に利用形態を規定するというもので、セヌ川については芸術的な橋への改築、サン＝ベルナル港とトゥルネル港のオープンスペースとしての整備、運河についてはアルスナルの港公園、ビレット地区の遊歩道の整備が実施されました。

さらに、シトロエン地区やベルシー地区等の沿川の大規模プロジェクト地区内においては新市街地の整備と平そくを合わせて河岸を整備すること、現在舟運のため特別に地区指定を受けている地域を以下の機能区分に従い3区分し、これら3地区においてセヌ川とその運河の特徴や河岸の眺望に調和するよう建築物や施設配置整理統合することとされています。

ア、パリの歴史的な中心地区に存する地域——遊歩道、親水・レジャー施設(非営利)のため排他的に利用し、その他は美化、保全・維持および治水のための施設のみ許可する。

イ、上記地域の上下流に隣接する地域——中間地域として上記施設に加え、その他河岸の活性化のためのレジャー施設および河川に関連するニーズを満たすための施設や建築物を許可する。

ウ、上記のさらに上下流の地域(東は市境からトルビアック橋まで、西は同じく市境からガリグリアーノ橋までの間)——舟運による物流に直接関係する港湾施設、特にコンクリートや砂利プラント、小麦粉倉庫、建設資材・

廃材置場などを設ける。

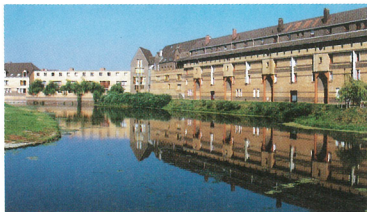
このため、これら3地区については建築物の用途、大きさ、外見についての規制条件が定められており、このような施策により河岸の景観や河を見通した眺望を確実に改善するものと期待されています。

3. 都市化との闘い

フランスにおいてもわが国と同様、近年大都市への人口集中が激しく、このため、農山村における過疎化、人口集中に伴う都市の歪が大きな政治経済社会上の課題となっているようです。

フランス政府機関による調査報告書「都市は水を再発見する」には、主として大都市周辺の都市化の洗礼を受けた12地域の河川および沿川地域整備の事例が報告されています。これら12事例のうち、西部および北部の5事例について踏査した結果、いずれも中小河川もしくは運河に連なる水路網を対象に、水辺を整備するとともに次のような施策が講じられつつあることが分かりました。

- ア. 遊水池等の洪水調節施設の設置および洪水被害の軽減
- イ. 方策（氾濫域の土地利用凍結 and/or 買収）
- エ. 下水道整備による水質汚濁の防止
- ウ. 沿川用地の積極的取得とオープンスペースとしての整備
- エ. 水路と都市開発との一体化による水辺の整備・建築物への水のあしらい。



水面と建築物との融合
(ダンケルク近郊グランドサンス)

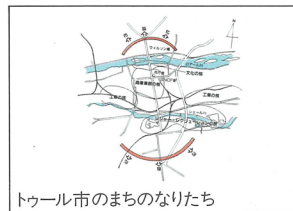
なかでも、水辺に積極的に都市開発を進め、水辺と建築物との融合を図っているグランドサンス市（ダンケルク近郊—クールガン水路）の事例は特筆すべきものといえましょう。

4. 水辺と都市施設

さて、フランスの中小河川から大河川の水辺のいくつかをまちとの関係で見ると、舟運が今なお盛んな水辺を除いて、都市内の水辺はまちの表玄関としての、いわばまちの顔としての水辺と、まちの裏庭として市民の憩いの場としての水辺、遊覧・遊興の場としての水辺（水面）、ならびに先のグランドサンス市の水辺のように市民生活に融合した

水辺があるようです。

パリのセーヌ川の魅力がパリのもう一つの顔であるシャンゼリゼ通りの起点であるチュイルリー宮殿やルーブル宮殿をはじめ、シャイヨー宮殿、ブルボン宮殿等の各宮殿、ノートルダム寺院、エッフェル塔とシャンド＝マール、コンコルド広場等の著名な庭園、建造物が河岸に隣接しているところからきているように、まちの顔としての水辺の魅力は河岸に隣接する都市施設の魅力に大きく依存しているといえましょう。



トゥール市のまちのなりたち



トゥール市内ウィルソン橋上り
ロアール川左岸上流をみる。

パリの南西方約200kmに位置するトゥール市はロアール川とその支川シェール川との間にあり、かつて舟運で盛えたまちですが、河港として盛えたロアール川沿いには14径間の大理石造アーチ橋であるウィルソン橋を中心にその上下流の河岸に隣接して、文学大学、美術大学、市立図書館、トゥールの古城を修復した歴史館ならびにいくつもの広場と公園を配して市の文化面の核を形成しており、これら河岸背後の都市施設に美しいウィルソン橋ならびにその橋詰めおよび河岸の整備とが相俟って、まさに“まちの顔”にふさわしいたたずまいを見せています。

トゥール市街の南、シェール川沿川はこれとは逆に市民の憩いの場としての水辺が、旧河道跡とみられる湖の水面と川中島を活用して整備されており、河岸ののり面の植栽および高水敷に設けられた遊歩道がこれらの水辺空間を結ぶ動線としての役割を果たしています。

このように、まちの顔としての水辺が主として隣接する都市施設の魅力に依存しているのに対して、裏庭としての水辺はトゥール市街地内のシェール川沿いの水辺やパリ近郊マルヌ川沿いの水辺に見られるように、その魅力は水面と隣接するオープンスペースならびに緑の魅力に負うところが大きいのではないかと思います。



パリ近郊セーヌ川
支マルヌ川の水辺、
水面と緑とが調和している。